



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	江田, 真毅; 成田, 佳子
Citation	
Issue Date	2013-07-10
DOI	
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52993
Right	
Type	book
Additional Information	
File Information	MuseumNews_27.pdf

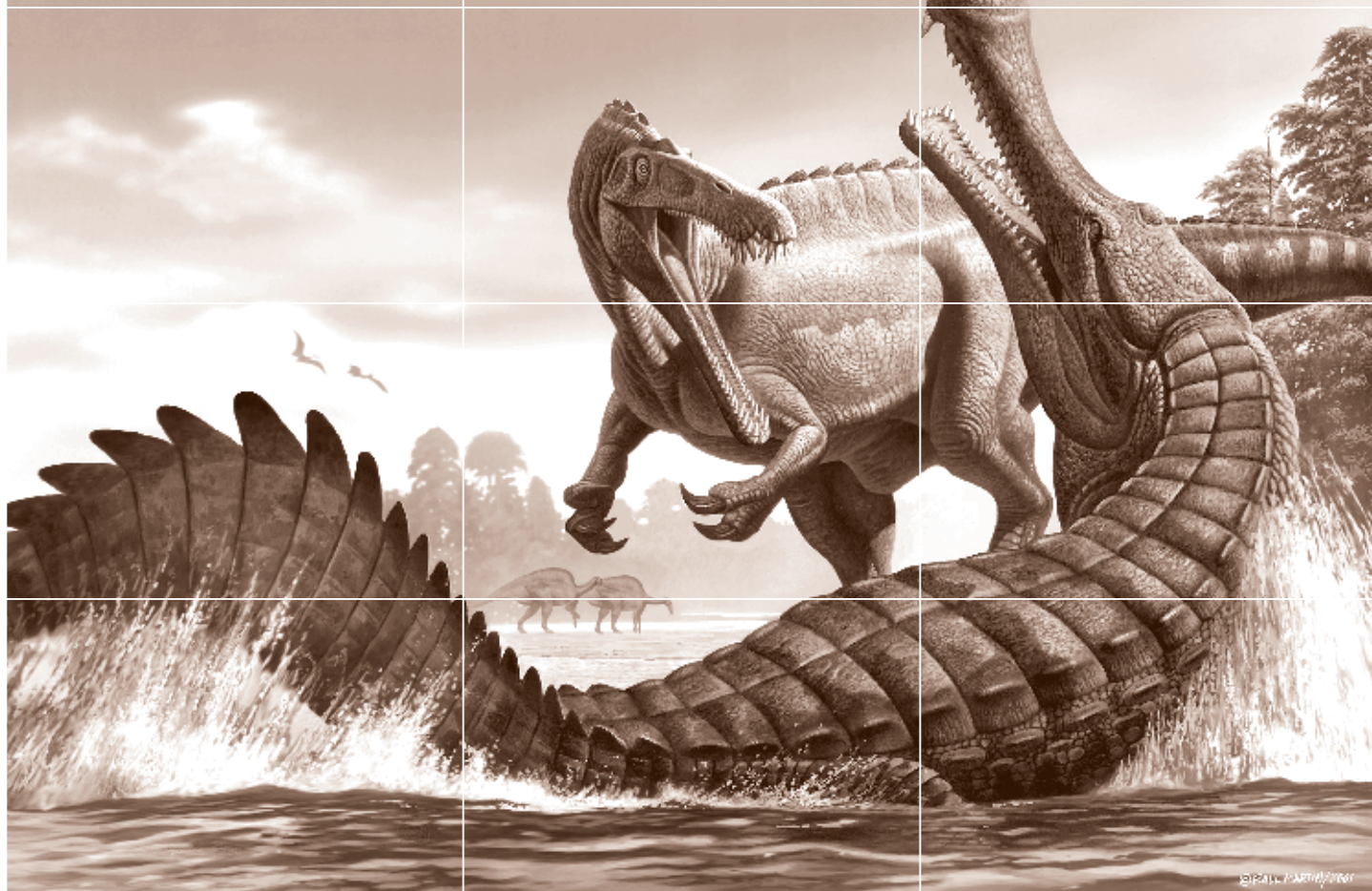


[Instructions for use](#)

巨大ワニと恐竜の世界

— 巨大爬虫類2億3千万年の攻防 —

平成25年7月19日(金)～10月27日(日)



CONTENTS

- 01 夏季企画展示
「巨大ワニと恐竜の世界
— 巨大爬虫類2億3千万年の攻防 —」
- 04 平成26年度企画展示
「がくせん学船 洋上のキャンパスおしよろ丸」展 イラスト募集
- 06 タイ王国国立科学博物館への表敬訪問
- 07 インドネシア・ジャワ島のチョウ研究
— 北大総合博物館での滞在とその成果 —
- 09 2012年度 卒論ポスター発表会
- 11 入館者80万人達成



ディノスクスの頭骨

夏季企画展示

「巨大ワニと恐竜の世界 —巨大爬虫類2億3千万年の攻防—」

●平成25年7月19日～10月27日

陸上の王者ティラノサウルスvs水辺の王者ディノスクス。どちらも体長10mを超す巨大な絶滅動物です。ワニと恐竜は、共に約2億3千万年前に地球上に出現しました。その後現在まで、ある時は競争し、またある時は共存しながら進化してきたのです。この夏の企画展示「巨大ワニと恐竜の世界」では、約2億3千万年前(三畳紀後期)までさかのぼり、ワニの進化と恐竜との争いを紹介します。約2億3千万年前の南米大陸、約1億5千万年前(ジュラ紀後期)の北米大陸、約1億年前(白亜紀中頃)の Gondwana 大陸、そして恐竜が絶滅する直前の約7千万年前(白亜紀末)の北米といった世界が、時空を超えて北海道大学総合博物館に現れます。ここで、展示されるいくつかのコーナーを紹介します。

まずは、約2億3千万年前の南米大陸が舞台です。この時代には全ての大陸が陸続きになった超大陸パンゲアが存在し、ワニと恐竜の祖先はこの時代に生まれたといわれています。当時のワニは、現代のように水辺に棲んではおらず、恐竜のように陸上を闊歩していました。一方で恐竜の祖先は小型のものが多かったのです。この時代には、ワニや恐竜以外にもスカフォ

ニクスのような絶滅爬虫類が棲んでいました。

次に、約1億5千万年前の北米大陸。現代型ワニが誕生し、恐竜は巨大化しました。ワニの誕生から約8千万年後、北米大陸には湿地帯が広がり、アロサウルスやカマラサウルスなど多くの恐竜が栄えていました。一方で、恐竜の繁栄に押されて、ワニたちは水辺へと生活圏を変えていきます。この時代にワニの体は水辺生活への適応を成し遂げ、現代型の姿形をしたワニが出現しました。

その約5千万年後の、約1億年前の Gondwana 大陸。ワニも巨大化し、恐竜はさらなる繁栄を遂げます。この頃の南半球には、陸続きだったアフリカ・南米・オーストラリア・インド大陸が Gondwana 大陸を形成していました。この時代、水辺支配を達成したワニは恐竜と争うかのごとく巨大化していきました。その代表が体長12mのサルコスクスです。同時代に棲んでいた恐竜にスコミムスがあり、サルコスクスと縄張りを巡って戦っていたのかもしれませんが。

最後に、約7千万年前の北米大陸。この時代は、巨大ワニと巨大恐竜の戦いが繰り広げられていました。このころ、絶滅直前の恐竜は最も多様化し、大繁栄をおさめていました。北

米ではワニが繁栄を続け、巨大ワニが存在しました。ワニの歴史の中でも王者と呼ばれるディノスクスです。史上最も巨大なワニで体長12m、体重8tにも達しました。その大きな体と強靱なアゴを武器に恐竜を襲っていたことも知られています。ティラノサウルスと共存していたことも知られ、水辺では最強同士の争いがあったのかもしれませんが。

このようなストーリーを中心に、北海道初公開の標本を多数そろえ、巨大ワニや恐竜化石など約50点を展示します。

また以下の関連セミナー(入場料無料・予約不要)も行います。

平成25年7月28日(日)13:00～14:00
総合博物館 N308
飯島正也(理学院自然史科学専攻博士課程1年)
『日本にいたワニたち』

平成25年8月4日(日)13:00～14:00
総合博物館 N308
吉田純輝(理学部地球科学科4年)
『白亜紀の北米の竜脚類』

平成25年8月11日(日)13:00～14:00
総合博物館 N308
園部英後(理学院自然史科学専攻修士課程1年)
『「うんち」からみる古生物』

平成25年8月18日(日)13:00～14:00
総合博物館 N308
田中公教(理学院自然史科学専攻修士課程2年)
『トリと恐竜の世界』

平成25年8月25日(日)13:00～14:00
総合博物館 N308
高崎竜司(理学院自然史科学専攻修士課程1年)
『サハリン島南部上部白亜系から産出したニッポノサウルスの系統位置の再検討』

平成25年9月15日(日)13:00～14:00
総合博物館 N308
小林快次(総合博物館 准教授)
『恐竜の最新研究』

小林快次
(研究部准教授/古生物学)



ティラノサウルスの頭骨

北大総合博物館との恐竜共同研究



KID Expeditionの調査隊

私は平成25年1月から3月まで北大総合博物館の特任教授として招聘され、滞りました。滞在中は総合博物館の小林快次准教授と共同研究を行いました。共同研究の対象になった化石は、私たちが2006年から5年間かけてモンゴル・ゴビ砂漠で発掘した恐竜化石です。今回、その共同発掘を紹介させていただきます。



発掘したタルボサウルス。一番右がイ・ユンナム博士

この共同発掘は、KID Expedition (Korea International Dinosaur Expedition) と呼ばれるもので、世界中から恐竜研究者が集まって行った大規模な恐竜発掘調査です。日本からは小林准教授が参加しました。その他、米国、カナダ、中国、ポルトガル、スロバキア、デンマーク、アルゼンチンといった国々からも参加してもらいました。毎年40日程度調査し、数多くの恐竜化石の発見につながりました。

調査地は、モンゴル南部に広がるゴビ砂漠で西から東まで広い範囲を対象としました。時代は白亜紀後期を中心とし、当時の恐竜の多様性の解明を主な研究テーマとしました。ゴビ砂漠西部には恐竜産地として有名なネメグト

盆地が広がっています。そこからは、ティラノサウルスの近縁種であるタルボサウルスを筆頭に数多くの巨大恐竜を発掘しました。広範囲に詳細を調査したところ、発見された化石の多くがタルボサウルスとガリミムス(ダチョウ型恐竜と呼ばれ小林准教授が世界的なエキスパート)の化石でした。これらは獣脚類恐竜と呼ばれるものです。一方で、サウロロフス(ニッポノサウルスと近縁な恐竜)のような植物食恐竜の化石は非常に数が限られていました。生態ピラミッドを考えた時、本来なら植物食恐竜であるサウロロフスの仲間が多く発見されることが予想されます。実際に、カナダの同じ時代の地層から発見される恐竜の多くは植物食恐竜で占められ、ティラノサウルスの仲間のような肉食恐竜は数が少ないのです。恐竜時代のモンゴルは、カナダとは異なった生態系を持っていたのでしょうか。この事実は私たちの頭を悩ませる課題であり、現在も調査中です。また、私と小林准教授が行っている研究に、恐竜の食性を復元するというものがあります。まだ研究中で詳しいことは書けませんが、私たちがモンゴルから発見した化石により、ある恐竜が何を食べていたのかと

いうこともわかりつつあるのです。この研究も当時の生態系の復元を可能とし、もしかしたら将来大きなニュースになるかもしれません。

この調査はロシア製のトラックと日本製の車(トヨタや三菱)で行いました。発掘すると、大きな骨化石がたくさん出てきます。たくさん発見するのは大変うれしいことですが、その一方でそれをどのようにしてトラックへ積み込むかが大きな課題でした。ある時は、2トンを超えるジャケット(化石を石膏で包んだもの)を50メートル上に止めてあるトラックまで人力で運ばなければなりません。地面は砂で覆われ、足場も悪いのです。道具も限られています。先に紹介したように、調査地には何人もの博士がいるにもかかわらず良い知恵が出ない。みんなで「いったい何人の Ph. D. が必要なんだ!」と叫んだものです。しかし、そこで知恵のあるモンゴル人が登場します。彼らの知恵と強靱な肉体によって、器用にジャケットが移動され、あっという間にトラックへ積み込まれていくのを、我々は毎回感心しながら見ていました。こうして、私たちが発掘した化石は無事研究所に運ばれていったのです。

この KID Expedition は、多くの仲間にも助けられて成功した調査です。これだけ国際性豊かな調査が行われたのは、モンゴルでは初めてでした。不安も多く、また多くの問題も生まれましたが、ご協力いただいた研究者のみなさんとモンゴルの方々にも感謝いたします。また、この調査をきっかけに北大総合博物館と韓国地質資源研究院地質博物館は姉妹提携を結びました。今後も調査や研究を活発に行っていきたいと思っています。

また、小林准教授と現在行っている研究は、どれも面白いものばかりです。一日も早く皆様にその成果を紹介できるよう、研究を頑張っていこうと思っています。

Lee Yuong-Nam (イ・ユンナム)
(韓国地質資源研究院地質博物館 館長)

翻訳: 小林快次
(研究部准教授/古生物学)



竜脚類恐竜の発掘風景



大きなジャケットを崖の下まで運んでいるところ

新規常設展示

「北海道とアンモナイト」

—ミュージアムマイスター認定コース

社会体験型科目として学生が展示制作を担当

2012年度後期、新規常設展「北海道とアンモナイト」コーナーの展示制作が実施されました。ミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目(担当:小林快次准教授、湯浅万紀子准教授)として開設され、幅広い分野の大学院生・学部生10名が参加しました。「アンモナイトの産地という北海道の知られざる一面を紹介すること」をテーマとし、展示内容の決定から実際の制作作業、展示解説までを学生が主体となって行いました。北海道はアンモナイト化石の産地として世界的に知られており、開拓の時代より日本の古生物研究を育む土壌となってきました。北海道とアンモナイトにまつわる様々なトピックを、豊富な化石と共に展示しています。



完成した展示と担当学生

常設展示

「北大の蔵書」リニューアル
—観る人から読む人へ—

本はどこにあるでしょうか? 書店や図書館、机の上の教科書や眠る前に読む枕元の小説など、本は私たちにとってとても身近な存在です。総合博物館には、北大が所蔵する本をテーマにした展示室があります。木製の本棚や机に本が並び、レトロな雰囲気が漂う展示室「北大の蔵書」は、博物館を訪れる人を「展示を観る人」から「本を読む人」へととぎやみず。

平成25年4月2日に常設展示2階「北大の蔵書」展示室がリニューアルオープンしました。附属図書館と大学文書館の協力のもと、平成24年度文学研究科「人類学特別演習」(担当:佐々木亨)において、11名の大学院生が作成しました。クラーク博士らが持ち込み教科書として推奨した書籍や、「海底二万哩」などで有

名なジュール・ヴェルヌの初版本など、学術書籍から文学まで幅広く紹介しています。

開学以来、北海道大学附属図書館は収集収集を続け、その蔵書数は現在約380万冊におよびます。北海道という土地柄、湿気や害虫、災害などによる被害が少なく、多くの書籍が良好な状態で保存されていることが特徴です。その蔵書の一部に触れ、北大の歴史をたどりつつ、本と人との関わりを振り返ります。

今後、展示室内にiPadを設置し、電子書籍により展示している書籍の一部が閲覧可能に

博物館まつりでの
展示解説

制作についての議論は12月から3月にかけて、直接、またはオンラインで不定期に行われました。異なる背景をもった学生達が各々の視点から意見を出し、毎回白熱したものとなりました。特に展示のデザインには力が入られ、展示空間に調和しつつ目を引くよう、ケースの仕様から固定金具1つに至るまで工夫が凝らされました。

すべてが手さぐりの中での展示制作は困難の連続でした。限られた知識と経験のなかで知恵を絞り、また必要に迫られ各自が新しい技術や初めてのことにチャレンジしました。普段の講義では味わえない実感と経験を得ることができ、大変有意義な苦勞でした。

展示は博物館まつりに合わせ3月16日から3階「アイランドアーク」廊下で公開され、学生が制作者の立場から解説に臨みました。実際

に来館者と話してみると、特に関心が集まるポイントが明らかになり、また説明不足な点やレイアウトの改善点もわかりました。現在、そうした反省点を踏まえ有志による改善作業が進められていますので、是非ご覧になってください。是非ご覧になってください。

担当学生(学年は2012年度当時):新井藤子(文学研究科 修士1年),安藤匠平(理学部3年),大内須美子(文学研究科 修士1年),太田晶(理学部2年),木野瑞萌(理学部3年),小塚陽介(水産学部2年),中島悠貴(理学部4年),中嶋実(水産学部1年),長谷部葉子(農学部3年),矢部敦子(農学部3年)

安藤匠平
(理学部4年)

なります。観るだけでなく、つい読んでしまう「北大の蔵書」に、是非足を運んでみてください。

担当学生(学年は2012年度当時):秋保佑香里,新井藤子,飯浜幹広,大内須美子,大沢彩加,勝木麗華,ジャイナ・ジャルキンキジ,鈴木嵩彬,高野修平,福岡沙和(以上、文学研究科 修士1年),長田詩織(理学院 修士1年)

長田詩織
(理学院修士2年)

平成26年度企画展示

「学船 洋上のキャンパスおしよる丸」展 イラスト募集



水産学部附属練習船おしよる丸IV世は平成25年度をもって引退し、新たに造船されるおしよる丸V世へその役割が引き継がれます。「消えゆく船」と「生まれる船」の交差する平成26年度に、水産科学館(函館キャンパス)と総合博物館ではおしよる丸をテーマにした企画

GCOE 成果展示 第9期展示

北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」では、プログラムで実施している研究成果の一部を当館2階で展示しています。既に8回の展示を行ってきましたが、6月からは、第9期展示「境界研究—日本のパイオニアたち」を開催しています。境界研究とは、境界によって生じる様々な問題を扱う新たな学問領域です。境界によって生じる争いの原因や解決への課題、形成される生活圏とその変容、そして、境界が人々に与える物理的・心理的影響を探る試みです。

この度の展示では、シベリア抑留による境界移動の心象を中心題材として描いた画家の香月泰男氏、境界の移動によって失われた生地、樺太の位置づけを問う詩人・文筆家の工藤信彦氏、ユーラシアを隅々まで歩き、紛争の現場をとらえ解決に身を賭した国際政治学者の秋野豊氏、島嶼・農山漁村をくまなく歩き、忘れられた日本人の暮らしに光をあてた農民学者・社会運動家の宮本常一氏を「境界研究」の先人と位置づけ、その足跡を辿ります。第9期展示は、前後半に分かれます。香月氏

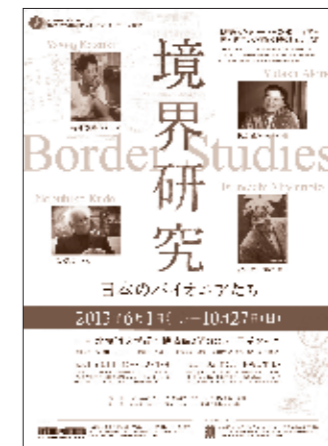
展示「学船 洋上のキャンパスおしよる丸」を開催することとなりました。そこで、船や海をイメージ、またはモチーフとし、展示や練習船に親しみを持ってもらえるイラストを広く募集します。この公募と企画展をとし、多くの方に練習船の存在とその使命を知っていただければと思います。

募集期間:

2013年7月1日~2013年10月31日まで

採用作品:1点(副賞3万円)

募集要項は総合博物館のWebサイト(www.museum.hokudai.ac.jp)からダウンロードしてください。

藤田良治
(研究部助教/博物館映像学)

と工藤氏を取り上げる前半が6月1日(土)~8月25日(日)、秋野氏と宮本氏を取り上げる後半が9月1日(日)~10月27日(日)となります。会期中は8月を除く毎月第3土曜日に計4回の展示関連セミナーを開催します。是非ご参加ください。セミナーの詳細はチラシまたはHPをご覧ください。

<http://www.museum.hokudai.ac.jp/special/article/19/>

木山克彦
(スラブ研究センター助教)

企画展示

「北のすみれ」



ボランティアによる展示解説の様子

総合博物館では、標記展示を4月16日から5月12日まで開催しました。季節を先取りして北海道のスマレ属植物を解りやすく紹介し、かつ最新の植物学的知見も含んだ展示を目指しました。

展示の主要部分は、当館ボランティアであり30年近く植物画を描いてこられた船迫吉江さんによる実寸大のスマレの植物画50点です。当館植物標本庫に保管されている戦前の千島やサハリン産タイプ標本から復元され、描かれたものもありました。花の分解図や托葉など重要な標徴形質も描きこまれており、植物学的にも正確であり来館者にも特に興味を持って見て頂けたと思います。

さらに、北海道とその周辺地域で戦前からごく最近まで収集されてきたスマレの押し葉標本も展示しました。また、テーマ解説パネルで「スマレ」の語源、北海道における地理分布やシカによる食害問題、花粉形態、最新のDNA解析による系統といった研究トピックを紹介し、日本と北海道のスマレ属植物リストや北海道のスマレ属植物のカラーズライドショーなどでその多様性をご理解いただけたかと思えます。

展示にあたっては、北方山草会や博物館ボランティアなど多くの方にご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

高橋英樹
(研究部教授/植物体系学)

「地質の日」記念企画展示

「豊平川と共に～その恵みと災い」

5月10日の「地質の日」を記念する今年で6回目の標記企画展示が、4月23日(火)から6月2日(日)まで総合博物館3階企画展示室で開催されました。主催は北大総合博物館・日本地質学会北海道支部・日本応用地質学会北海道支部・北海道応用地質研究会・北海道地質調査業協会・産総研地質調査総合センター・道総研地質研究所・札幌市博物館活動センターです。

札幌の街は豊平川扇状地に建設され発展してきました。2年前の「地質の日」記念企画展示では「豊平川と私たちーその生いたちと自然ー」を行いました。今回の展示では、札幌の開拓時代に豊平川の河川水と伏流水・地下水が飲料水・水運・動力源として果たした役割や創成川などの運河の開削を紹介しました。一方では、札幌の街は扇状地の宿命と



して豊平川による大水害を明治以来たびたび被ってきました。いくつかの記録的大洪水の規模や様子を展示しました。

関連行事として、5月11日(土)に開催された前田寿嗣氏(札幌市立柏中学校教頭)による市民セミナー「豊平川が作りだした自然景観」には100名近い参加者があり、盛会でした。5月18日(土)には植物園～清華亭(偕楽園跡)～北大構内を歩く市民地質巡検「札幌のメムを訪ねる」があり、35名の市民がかつ

てのメムとその流れの跡を辿り、附近の古地形を学びました。26日(日)には松澤和則氏(サッポロビール博物館館長)による講演「開拓者が造ったサッポロビール」が行われ、参加者はサッポロビールと豊平川のかかわりを改めて認識しました。

在田一則
(資料部研究員)

総合博物館×Google



左/北大総合博物館内(ストリートビューより)
右/水産科学館内(ストリートビューより)



北海道大学総合博物館本館および水産科学館(函館キャンパス)の展示室がGoogleマップのストリートビューで公開されました。ストリートビューはGoogleが提供するGoogleマップ機能の一つで、ベルサイユ宮殿、スタンフォード大学、北大メインストリートなども公開しており、360度のパノラマ写真でその場にいるように館内を見ることが出来ます。撮影は1日が行われ、大きな台車付きのカメラで館内を丁寧に撮影しました。カメラ位置が2.1メートルと高い視点からの撮影のため、見下ろすように館内展示を見渡せます。

当館Webサイトの「常設展示」ページで、企画展示室を除く1階から3階までをバーチャ

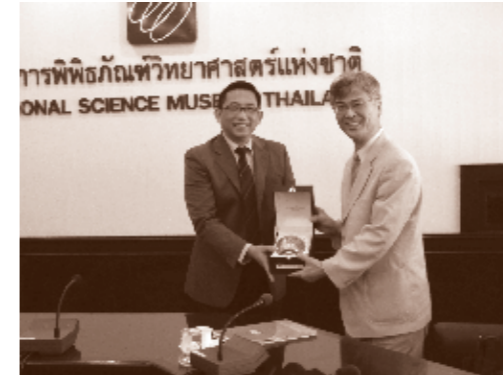
ルに移動できます。各展示室の雰囲気や伝わり、文字サイズの大きいパネルは画面上で読むことが可能です。また、Googleマップを開き、「北大総合博物館」を検索、表示された地図上に黄色い人形のアイコン「ペグマン」をかざして配置すると、その地点の施設内をストリートビューで参照できます。水産科学館では、検索結果に表示される概要のすぐ下に画像が貼られています。

藤田良治
(研究部助教/博物館映像学)



館内撮影イメージ

タイ王国国立科学博物館への表敬訪問



左上/記念品の交換 右上/集合写真 左下/サンプリング 右下/夕食会

2013年4月19日にタイ王国の国立科学博物館(以下、NSM)へ表敬訪問を行いました。北大総合博物館とNSMは2012年9月に部局間交流協定を締結しました。表敬訪問へは当館から津曲敏郎館長、大原昌宏副館長、阿部剛史講師、江田真毅講師と私の5名が参加しました。NSMはバンコク国際空港から車で1時間ほどのパトゥムタニー県にあります。NSMではPichai Sonchaeng館長、Manop Issaree副館長の他、多くの研究員、事務員の方々が迎えてくれました。NSMでは、今後の両館の交流についての会議が開かれました。その会議では、2013年8月に開催されるタイ科学祭への北大総合博物館展示ブースの設置、2014年にタイ東部のチャーン島での共同フィールド調査とワークショップの開催、若手研究者等の人材交流、アングマン海での共同深海研究調査などについて意見交換が行われました。また、会議の後には記念品の交換が行われました。Sonchaeng館長からはベンジャロンと呼ばれるタイ伝統の磁器製品とNSMオリジナル水筒が総合博物館へ、津曲館長から

は北大オリジナル扇子やタンブラーなどがNSMへ贈られました。タイでは海藻食のブームが起きているようで、総合博物館側の記念品であった海藻展のクリアファイルは話題を呼んでいました。昼食後はNSMにある科学博物館、情報技術博物館、自然史博物館および標本庫を見学し、NSMからバンコク市内に戻りました。当日の夜はバンコクの王宮近くにあるチャオプラヤー川沿いのレストランにて歓迎会が催され、トムヤムクン(エビなどの入った酸っぱ辛いスープ)やパッタイ(ライスヌードルの炒め物)といったタイを代表する料理に皆、頬がゆるんでいました。

大原副館長、阿部講師と私は表敬訪問の前日までの4日間、タイ南部のタイランド湾に位置するサムイ島周辺にてNSMと共同フィールド調査を行いました。NSM側からはVeera Vilasri研究員(魚類)、Weeyawat Jaitrong研究員(昆虫)、Jantharas Posombat技官(海藻)の3名が参加しました。バンコクからサムイ島までは自動車と船を乗り継いで、14時間ほどかかりました。昆虫班は旅の途中で自動車内から牛を発見すると、牛

糞などから標本採集を行いました。2日目はサムイ島で、3日目はサムイ島南方に位置するタン島へ小舟で渡り、各々フィールド調査を行いました。昆虫班は山中にて、海藻班は海辺にて、魚類班は海辺と漁船の水揚げ場にて標本を採集しました。最終日は早朝にサムイ島からバンコクへ向けて出発し、初日と同様に昆虫班は標本の採集を行いました。これらのフィールド調査で得られた成果を報告書等にまとめることができたかと考えています。一方、江田講師は前日までの4日間、NSM、チュラロンコン大学、カセサート大学にてニワトリ等の骨格標本の調査を行いました。標本調査にはCholawit Thongcharoenchaikit技官(古生物学)が同行しました。標本調査は順調に進み、既に次回の調査も検討しています。

とても暖かく迎えて下さったNSMの方々に感謝の意を表します。コップン・クラブ(ありがとうございました)。

河合俊郎
(研究部助教/魚類系統分類学)

インドネシア・ジャワ島のチョウ研究 —北大総合博物館での滞在とその成果—

北大総合博物館とインドネシア・ポゴール動物学博物館は2011年2月25日にインドネシアのチビノンで博物館間協定を交わしました。私たちの協定の目標として、(1)共同研究、教育、専門性の向上のために、館間の職員招聘交換を促進させること、(2)研究と教育に関するシンポジウム、講演会、ワークショップなどを相互に企画すること、があります。

この目標の実現のために、私は北海道大学総合博物館の客員教授として3ヶ月間(2012年12月1日から2013年2月28日まで)の招聘を、大原昌宏教授から受けました。私の札幌での滞在、特に博物館での研究生活は、とても生産的で楽しいものでした。北大総合博物館では「ジャワ島のタテハチョウ科の分類学的な研究書(モノグラフ)」と「インドネシアジャワ島ハリムン・サラック国立公園のチョウに関する論文」の執筆に集中することができ、また、博物館の標本庫(N312, N313)に収蔵されているチョウのコレクションの研究調査と標本整理も行いました。北大総合博物館の標本コレクションのみならず、東京大学総合研究博物館(矢後助教の案内による)と東京農業大学進化生物博物館(青木博士、山口博士)のチョウ類コレクション、さらに山梨県小淵沢に在住のチョウ類研究家の塚田氏の膨大なコレクションも訪ねることもできました。北大総合博物館で開催されるシンポジウム、画像検討会、プラスチック標本作製ワークショップなどにも参加でき非常に参考になりました。博物館に所属する研究者、学生・院生そしてボランティアの方々と一緒に過ごせたことは私の経験を豊かにし楽しい滞在にしてくれました。

以下は、私が北大総合博物館の滞在中に研究した内容です。一部は2013年2月11日に行われた国際シンポジウム「Diversity of Insects in Indonesia: collaborations between Hokudai and Bogor Zoological Museum」の中でも発表しました。

インドネシア・ジャワ島のチョウ、その多様性と重要性

ジャワ島は、インドネシアの他の島に比べ、もっともよくチョウ相が調べられている島です。19世紀と20世紀初期にはジャワ島から多くのチョウの記録があります。当時、チョウの研究者や愛好家が数多くジャワ島に採集に訪れたことが、その記録からわかります。現在入手可能なさまざまな文献から、ジャワ島のチョウの記録を整理すると500種以上になります。しかし、それらのチョウがかつて記録された地域は、ジャワ島の急速かつ広範囲な環境変化により、直接的あるいは間接的に開発の影響を受けていることは疑い無く、現在もそのチョウが生息、分布しているかは定かではありません。このような継続的な環境変化を調べる観点からも、ジャワ島のタテハチョウ科の分類学的整理と分布確認の研究は、とても意義のあるものです。

ジャワ島22カ所でチョウの分布を確認する研究(インベントリー研究)は、2004年から2010年にかけて行われました。その結果は「ポゴール植物園のチョウ」「チレマイ山国立公園のチョウ」「ウジュンクロン国立公園のチョウ」の3冊のガイドブックに反映されています。

チョウの同定は、森下(1981)、青木ほか(1982)、Ackery & Vane-Wright (1984)、D'Abrebra (1985)、Tsukada (1985, 1991)、Corbet & Pendlebury (1992)を用い、学名は、Bridge (1988)、Vane-Wright & de Jong (2003)、Wahlberg et al. (2005)、Wahlberg & Brower (2006, 2009)、Aduse-Poku et al. (2009)、とインターネット ftp.funet.fi (2013)、gbif.org (2013)、tolweb.org (2013)に従っています。

ジャワ島22カ所の調査地点からは、文献から計216種のタテハチョウ科のチョウが知られています。今回の調査では158種のみ

が確認され、8種のジャワ島固有種のうち、*Euploea gamelia*, *Parantica pseudomelaneus*, *Zeuxidia dohrni*, *Elymnias ceryx*, *Mycalesis moorei*, *Mycalesis nala*の6種のみが確認できました。しかし、*Hestinalis mimetica*と*Lethe samio*の2種は確認できませんでした。ジャワ島とバリ島を合わせると固有種は*Cyrestis lutea*, *Lethe manthara*, *Mycalesis sudra*, *Ypthima nigricans*の4種となります。

さて調査の結果、「なぜわずか158種しか確認できなかったのか」「なぜ固有種はこれほど少ないのか」という疑問がわきます。後者の疑問は、ジャワ島には、スマトラ島やカリマンタン(ボルネオ島)との共通種が多く分布していますので、それが答えといえるでしょう。しかし、前者の疑問に答えることは簡単ではありません。

未確認の種の再発見には、より適したインベントリー研究が必要であることを、研究結果は示唆しています。今回の研究プロジェクトは、それぞれの地点で約一週間の調査期間しかなく、調査不足は否めません。昆虫は生活史(一生の長さ)が短く、わずかに一週間の調査では、卵・幼虫・蛹のステージであった種については確認ができません。

チョウの保全を目的として「ジャワ島のチョウの重要性」について、意見を述べるときは、私たちは十分に注意を払わなければなりません。そこには、Eberhard et al. (2009)が指摘する「種の検出に関わるエラー(未検出の種数の多さ)」があるからです。

「ジャワ島で58種のチョウが再確認できなかった」ということは、ジャワ島からそれらのチョウは姿を消した、いわゆる「絶滅した」ということなのでしょう。いいえ、実際には生息しているのに私たちが採集できなかっただけかもしれません。私たちは保全に対して提言や結論付けするときには、より慎重さが求められます。その種は「まだ生息している」と絶滅の危険度を低く評価したり、あるいは「既に絶滅してしまった」と高く評価してしまう過ちの可能性があるのです。

「調査地の数×生息種数/非生息種数」は、種の重要性の指数となります。ある調査地点の普通種の不在は心配するに及びません。それは私たちの調査時期にその種が成虫でなかったというだけのことでしょう。しかし希少種の不在は問題です。これは

成虫が飛ぶ時期ではなかったという単純な答えだけではなく、すでにその調査地からは姿を消している(絶滅)の可能性が高いからです。

ジャワ島に分布するタテハチョウ科の属と種の分類学的研究

ジャワ島に分布する216種のチョウについて分類学的データを整理しました。ジャワ島から記録のあるすべての属についてもデータを加えました。属のデータには、有効名、文献、タイプ種について記載し、学名には命名者と命名年を記しました。英名がある場合は記し、インドネシア名はそれにない、原記載、タイプロカリティ、食草、分布、ジャワ島内での亜種、私たちの調査によるジャワ島内の分布確認記録、北大総合博物館所蔵標本をふくむその他の標本記録をデータとして整理しました。

ジャワ島ハリムン—サラック国立公園のチョウの重要性

ジャワ島のアゲハチョウ科の37種のうち16種がハリムン—サラック国立公園に分布しています。同じくシロチョウ科49種中18種、タテハチョウ科216種中80種、シジミチョウ科190種中15種、セセリチョウ科120種中4種です。本研究のシジミチョウ科(約8%)とセセリチョウ科の数は、明らかに不十分です。本調査で確認されたシジミチョウ科の15種中9種は、ジャワの他の調査地でも以前に確認されていますので、普通種と考えられます。この結果からもシジミチョウ科の近年の調査は依然不足です。これは「多くの種が消失した」のではなく、「確認用の標本を得るための十分な調査がまだ行われていない」ととらえるべきです。2004年からインベントリー調査をしていますが、主にタテハチョウ科の調査でした。小型のシジミチョウ科やセセリチョウ科のチョウは見逃しがちだったのです。ハリムン—サラック国立公園はジャワ島で最大の国立公園です。そこはタテハチョウ科の固有種や希少種の生息域として大切な役割を持っています。サラックからは2固有種、チカニキからは4固有種が知られています。

北大総合博物館所蔵チョウ標本の分類学的整理

標本庫N312とN313に所蔵されるチョウ標本の分類学的整理を北大総合博物館滞在中に行いました。N312には5つのキャビネットにチョウ標本は保管され、松村松年博士採集の標本も含まれていました。現在も学名が有効名であるタイプ標本といくつかのシノニム名の標本の確認を行いました。N313にはインドネシアのスマトラ、ジャワ、スラウェシ、マルクからの標本が収蔵されていました。これらの標本のデータは論文に含める予定です。

最後に、Siti Nuramaliati Prijono 博士(インドネシア科学省生物研究センター長、現在は自然科学分野副代表)、Rosichon Ubaidillah 博士(ポゴール動物学博物館長)、ポゴール動物学博物館の昆虫研究者、技官の皆さん、特にSri Hartini 博士にお礼申し上げます。津曲敏郎館長と大原昌宏教授(北海道大学総合博物館)には、北大訪問の機会を与えていただきました。村上麻季、山本ひとみ、田中真理、Dhian Dwibadra、博物館事務の皆様には、滞在中にお世話になりました。お礼申し上げます。



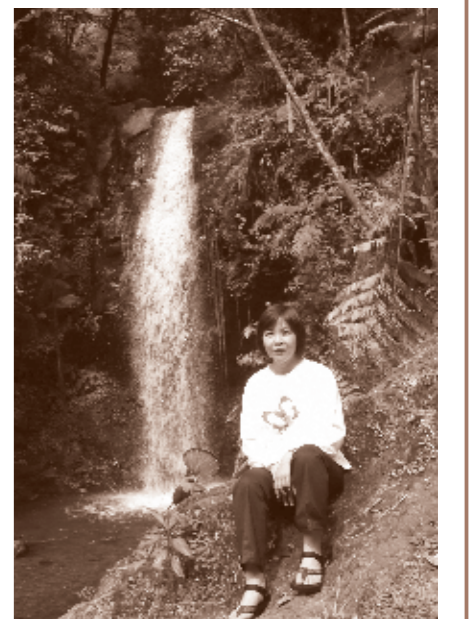
Idea stollii, ジャワ島西部に分布



Euploea gamelia, ジャワ島固有種



Polyura dehanii, ジャワ島とスマトラ島に分布



サラック国立公園 チダウの滝にて

ドゥニジャンティ ペギ Djunijanti Peggie
(インドネシア科学省(LIPI)動物部門・ポゴール動物学博物館)

2012年度

卒論ポスター発表会

本学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、博物館で来場者に分かりやすく説明して質問等に応答する「第5回 卒論ポスター発表会」を3月2日、3日に開催しました。当日は、暴風雪にもかかわらず学内外の多くの方にご来場いただきました。この取り組みは、北大の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目の一つであり、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目指しています。今年度は、農学部、理学部、文学部の4年生12名が参加しました。ポスターやプログラム冊子の制作、発表会の運営も社会体験型プロジェクトとして位置づけ、水産学部1年生と医学部2年生が北大カフェプロジェクトと協働して担当しました。

12名の発表者は、1枚のポスターを完成させるまで博物館担当教員の指導を受けて互いに意見交換し、改訂を繰り返しました。また、さまざまなプロフィールをもった来場者を想定



表彰式

「ミュージアムマイスター」認定式

総合博物館では、平成21年度より「ミュージアムマイスター」認定コースを設定しています。本コースでは、北海道大学が目指す全人教育を全学的に展開するため、専門の学部教育に至る縦割りの教育システムに、全人教育というキーワードで横串を入れた教育プログラムを展開しています。「導入科目」「ステップアップ科目」「社会体験型科目」の3つの段階から成る教育システムを設定し、課題探究能力、協調性と自主性を備え、問題解決能力、コミュニケーション能力、マネジメント能力を持ち、自己評価

来場者に説明する
4年生

したりハーサルを重ねて準備しました。彼らは2日間、ポスターの前に立って来場者に生き生きと説明し、質疑応答を重ねました。市民と北大教職員から成る審査員9名の投票による3種類の賞と来場者の投票による来館者賞が津曲敏郎館長から授与され、審査員からの講評会が行われました。受賞者は次の通りです。

◎最優秀賞

坂本真惟(文学部 人文科学科)
「ベッカフーミ作シエナ市庁舎
コンチストロの間の天井画について
—シエナ絵画の伝統と刷新—」

◎優秀デザイン賞

室谷美里(文学部 人文科学科)
「ケルン大聖堂に関する一考察
—バルダキン構造に着目して—」

◎優秀コミュニケーション賞

高崎竜司(理学部 地球科学科)
「サハリン島南部上部白亜系から産出した
ニッポノサウルスの系統位置の再検討」

◎来館者賞(同数票2名)

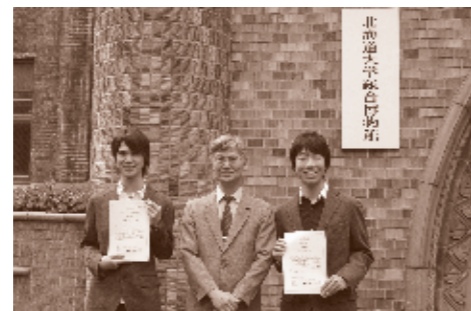
大橋悠文(農学部 応用生命科学科)
「シロイヌナズナCGS1遺伝子の
転写後制御機構における
リボソーム出口トンネルの解析」
常木生也(農学部 生物機能化学科)
「体内のミネラルバランスと潰瘍性大腸炎
との関係を探る—特に亜鉛に注目して—」

来場された方々には、普段は知ることのないさまざまな学部の4年生の研究成果を知っていただく機会となりました。発表者達の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直したり、他の学部・研究室の学生の研究を知ることができ、普段の学生生活では味わうことのできない大学博物館という場での貴重な経験を積んだことが綴られています。

湯浅万紀子
(研究部准教授/博物館教育学)

の視点を身に付けた学生を育て、広い視野と社会貢献とボランティア精神の涵養を図ることを目指しています。ミュージアムマイスターの認定要件は、導入・ステップアップ・社会体験型

科目を各4クレジット、合計12クレジット以上取得し、基準GPAによる基礎学力(平均点以上)を加味しています。さらに最終面談でもコミュニケーション能力を審査するため、博物館教員に



2012年10月の認定式の様子



2013年3月の認定式の様子

よる面談以外に、マイスターによるプレゼンテーションを行い、高いコミュニケーション能力を有する学生をマイスターとして認定しています。

2012年10月には新たに三嶋渉さん(認定当時は理学部3年)、山本大貴さん(同理学部3年)、そして2013年3月には、太田菜央さん(同生命科学院修士1年)の3名のミュージアムマイスターが誕生しました。認定式は10月

6日、3月16日に総合博物館1階「知の交流」コーナーで行われ、博物館教職員などが見守るなか、館長より認定証が授与されました。

現在、ミュージアムマイスターとして認定されている学生は20名になり、活動の場を広げています。また、認定コースにはこれまで126名が登録しており、講義や学生参加プロジェクトなど様々な活動に参加しています。

大学院生が企画・開発した
ミュージアムグッズ

グッズを開発した学生たち

2012年度大学院共通科目理学院専門科目「博物館コミュニケーション特論Ⅲ ミュージアムグッズの開発と評価」(担当:湯浅万紀子准教授、藤田良治助教)を受講した大学院生により2つのグッズが開発され、ミュージアムショップで販売されています。一つは館内のアインシュタインドームをモチーフとした「愛んしゅたいんDOOOOME!コースター」(2枚組270円税込)、もう一つは絶滅した哺乳類のデスモスチルス^{コソコソ}をモチーフとした「骨骨勉強 デスモスチルスふせん」(30枚×3種1セット350円税込)です。

「愛んしゅたいんDOOOOME!コースター」は栗原彩(文学研究科)、沼崎麻子(理学院)、吉川一真(理学院)の3名が担当しました。まず、当館のミュージアムショップで販売されておらず、需要が見込まれて手ごろな価格設定ができるコースターを開発することを決めました。そして、館内の見所である中央階段の吹き抜け「アインシュタインドーム」の知名度が低いことに着目し、コースターのテーマとして設定しました。ドーム壁面の朝・昼・夕・夜を意味する4つのレリーフを持つ「昼夜もなく学問研究に励む」という意味を反映し、レリーフのモチーフと北大生の一日をイメージした図柄をあしらいました。商品名「愛んしゅたいんDOOOOME!コースター」の4つの「O」は4つの丸いレリーフを意味します。「ドームいっぱい愛で、だらけ

るあなたに喝を、頑張るあなたに安らぎを」というキャッチコピーには、レリーフの意味を踏まえ、日々頑張る方々を応援したいという意味を込めています。購入者には、大学院生の制作による、アインシュタインドームの名前の由来やレリーフの意味、商品名の由来を付した解説書をお渡ししています。

「骨骨勉強 デスモスチルスふせん」は小林知恵(文学研究科)、塩谷和樹(理学院)、古井空(理学院)、高木優風花(環境科学院)の4名が担当しました。デスモスチルスについてはこれまで多くの研究がなされてきましたが、何をどのように捕食していたのか依然として不明であったり、多様な形態復元がなされていたりと研究課題が多く残されています。当館3階のアイランド・アークで展示されている骨格標本を見て終わりにしてしまうのではなく、その裏にある研究の「面白さ」、「難しさ」を知ってもらいたいという思いから、これをグッズのテーマに選びました。そして、デスモスチルスの骨格復元の多様性に着目し、二人の日本人研究者による復元図をモチーフに決定しました。更に、繰り返し使用して理解を深めることができることから、ふせんを制作することとし、利用場面を検討して勉強に役立つ機能を付与しました。具体的には、インデックス・参照用に吹き出しをつけたタイプ、復習・やり直しの記録用に復習回数を印字し日付欄をつけたタ

「ミュージアムマイスター」認定コースの概要、プロジェクトの詳細はHPでもご紹介しておりますので、こちらも併せてご覧ください。

<http://www.museum.hokudai.ac.jp/education/index.html>

草嶋乃美
(研究支援推進員)

イプ、自由にメモをとれるシンプルなタイプの3パターンをセットにしました。「愛んしゅたいんDOOOOME!コースター」と同様に、購入者には大学院生の制作によるデスモスチルス研究を解説したパンフレットをお渡ししています。

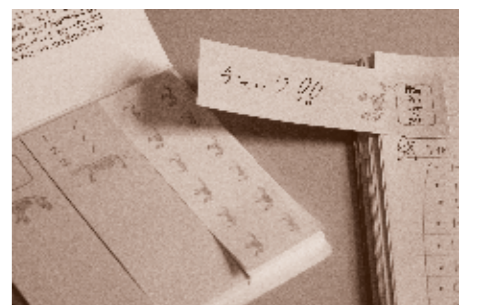
担当した大学院生がショップでプレスや来店者向けにグッズを説明する日を設けた他、来店者へのインタビューを実施しました。今後は、インタビューで寄せられた声をもとに、本プロジェクトの成果を評価します。ぜひ大学院生が企画・開発したグッズをショップでお手にとり、ご意見をお寄せいただければと思います。制作過程と大学院生のコメントは当館ホームページと公式Facebookでご紹介しております。

小林知恵
(大学院文学研究科 修士課程2年)

沼崎麻子
(大学院理学院 博士後期課程2年/ミュージアムマイスター)



愛んしゅたいんDOOOOME! コースター (2枚組 270円税込)



骨骨勉強 デスモスチルスふせん (350円税込)

入館者80万人達成



入館者80万人達成セレモニー

2012年10月6日(土)に開館以来の入館者が累計80万人に達し、記念セレモニーを開催しました。

80万人目の来館者は、学術交流会館で開催された日本気象学会2012年秋季大会参加者の九州大学大学院修士1年・尾堂深南さんです。尾堂さんは同じく学会に参加した本学修士1年の光岡昇平さん、幸田笹佳さん、千葉大学大学院修士1年の河上聖さん、名古屋大学大学院修士1年の田井わかさんと一緒に来館し、津曲館長から記念品としてオリジナルグッズが贈呈されました。セレモニーの司会進行はミュージアムマイスターの学生が担当し、展示物や博物館についての印象、80万人に選ばれた感想などをインタビューしました。

草嶋乃美
(研究支援推進員)

ホームカミングデーでの 学生による展示解説

卒業生に展示解説する
ミュージアムクラブ
Mouseionの学生

2012年10月6日に、北海道大学での初めてのホームカミングデーが開催され、総合博物館では学生達が展示解説を行いました。当館が活動を支援して博物館を舞台に活動しているミュージアムクラブMouseionの学生達が、次の5テーマについて解説しました。「総合博物館の古生物」(理学部地球科学科2年・太田晶さん)、「札幌農学校の外国人教師たち」(薬学部薬科学科2年・川原聡史さん)、「植物の誕生と渦鞭毛藻の魅力」(農学部森林科学科2年・小向愛さん)、「魚類の進化と不思議な形態」(水産学部海洋生物科学科2年・中原隆史さん)、「鈴木・宮浦クロスカップリング」



理学部卒業生に解説した現役理学部生

(理学部物理学科2年・若狭玲那さん)。歯学部の一期生をはじめ卒業生の方々やさまざまな年代の市民の方々にご参加いただき、ご質問をいただいたり、知らなかった情報を教えていただいたり、温かい励ましのお言葉をいただきました。Mouseionの3年生と1年生メンバーがサポートし、参加者の皆様と博物館での楽しい午後のひとときを一緒に過ごしました。

また、理学部3年生の三嶋渉さんと村野宏樹さん、山本大貴さんは、理学部の卒業生を対象にした展示解説を担当しました。それぞれ岩石分野、昆虫分野、古生物分野を15分で解説する予定でしたが、諸事情により解説時間が短縮されたため、急速、コンパクトな解説を行いました。臨機応変に対応できたのは3人が準備を重ねたことによります。彼らの解説は明快で、一生懸命に取り組む姿勢はとても好感が持てるかと評価していただきました。

湯浅万紀子
(研究部准教授/博物館教育学)

総合博物館が キャンパス紹介映像を制作



映像作品「[エルムの森]のキャンパスへ!」

2012年10月6日に開催された「ホームカミングデー 2012」において、同窓生の皆様に現在のキャンパスの様子を紹介するため、キャンパス紹介映像作品「ホームカミングデー 2012 おかえりなさい「エルムの森」のキャンパスへ!」を制作しました。この映像作品は、筆者が2年間撮りためた映像を15分間に編集したものです。

ポプラ並木やイチョウ並木、中央ローンで憩う人々、おしよ丸外洋航路の様子などが収められており、ゆったりとした時間の流れの中にある美しく生き生きとしたキャンパスを感じるこの映像となっています。木々が生い茂り緑の濃い夏や、吹雪の中構内を行き交う学生の様子、雪の中で行う工学部の綱引きは必見です。

ポプラ並木をバックに
ホームカミングデー
2012のロゴタイトル映像作品
「[エルムの森]の
キャンパスへ!」から
ノーベル化学賞受賞
祝賀会のワンシーン

この映像は、総合博物館入り口にあるウェルカムモニター上映用にアレンジされ、来館者のみなさまにもご覧いただいています。総合博物館Webサイトからも配信中ですので、ぜひ一度ご覧ください。

<http://www.museum.hokudai.ac.jp/news/article/157/>

藤田良治
(研究部助教/博物館映像学)

宇宙の4Dシアター



宇宙の4Dシアターボランティアでは、文化の日の翌日にあたる2012年11月4日、2回の公演を実施しました。上映作品は「星空の立体感」と「火星を旅しよう」。両回とも満席で、アンケート結果によると全てのご来場者に満足戴けたようです。

本公演は昨年度2回目の実施に当たりました。以前より実施頻度が低くなっていますが、これには理由があります。宇宙の4Dシアターボランティアは、一昨年度末に多くのメンバーが札幌を離れたため、昨年度は公演に必要なメンバーを集めるのに窮する事態に陥っていました。本公演の実施も危ぶまれていましたが、メンバー全員の熱意と、札幌を離れたメンバーからの力添え、そして新メンバーの奮闘によって、際

どいところで実施にこぎ着けることができました。

当ボランティアの活動環境は今年度入っても厳しい状態が続いていますが、新たなメンバーを迎えることにより少しずつ元気を取り戻しつつあります。興味をお持ちの方、一緒に宇宙を旅してみませんか?

山本順司
(研究部准教授/鉱物学・鉱床学)

ポプラチェンバロコンサート



1F「知の交流」コーナーでのポプラチェンバロ演奏は毎週木曜日と毎月第2・第4水曜日に行われ、多くの来館者からご好評をいただいています。

また昨年度下半期には計6回の企画コンサートを開催しました。11月4日(日)は、リコー

ダー、フルート、声楽も加わった「秋のコンサート」を開催しました。また、11月23日(金・祝)は「ランチタイム・コンサート」として、バロック・トランペットと声楽を交えた開催となりました。12月23日(日)には声楽にチェンバロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、リコーダーのアンサンブルが加わった「クリスマスコンサート」を開催しました。1月27日(日)には「アイルランドとイギリスの古い歌～民謡からバロックまで～」と題して、声楽、笛、ハープ、ギターを交えた演奏が催されました。2月24日(日)には「ヴェルサイユ宮廷の音楽」が声楽にフラウト・トラヴェルソを加えて、3月17日(日)には博物館まつりの企画演奏会として「バロック音楽の花束」と題してバロック・トランペット、リコーダー、バロック・ヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバを加えた演奏が催されました。いずれの演奏もバロック音楽が中心となりましたが、会場から溢れるほどのご参加をいただき、多彩なプログラムをお楽しみいただきました。聴衆からは楽器に関する質問なども寄せられ、演奏するボランティアの皆さんが熱心に答えていました。

阿部剛史
(研究部助教/海藻系統分類学)

サイエンスパーク in 北海道大学総合博物館



実験のアドバイスする鈴木名誉教授

総合博物館では、ノーベル化学賞受賞者である北海道大学名誉教授鈴木章氏と高橋はるみ北海道知事をお招きし、2012年12月8日に札幌市内の小学5・6年生と保護者30組を対象に、科学への関心を深めてもらうイベント「サイエンスパーク in 北海道大学総合博物館」を開催しました。

まず高橋北海道知事と山口佳三副学長(当時)からご挨拶を頂き、鈴木先生からクロスカップリングについてご説明頂きました。続いて工学研究院の山本靖典特任准教授の説

明を受けながら、児童は各自に用意された実験キットを使ってクロスカップリングの実験を行いました。実験用の手袋をつけることや試薬の扱いについて苦労している児童に、鈴木先生は優しくアドバイスされていました。児童全員が実験を成功させ、特別な条件や装置がなくても有機化合物合成の行えるクロスカップリングの素晴らしさを体感したようでした。

鈴木先生への質問コーナーでは、児童から、化学の道に進んだ動機、どのような子どもであったか、さまざまなクロスカップリングがある中で鈴木一宮浦クロスカップリングがよく使われる理由など、多くの質問が寄せられました。鈴木先生はそれぞれに、フィーザー教授の『有機化学』という教科書との出会いがきっかけであること、実は数学が好きであったこと、ホウ素が他の物質と反応しにくいことを利用して特別な条件の要らないクロスカップリング反応にしたためであることなど、にこやかな表情で丁寧に答えられていました。最後に鈴木先生は、文学でも経済でも医学でもなんでも好きな道を進んでほしいが、科学と技術の世界も非常に面白いことを知ってほしい、私のあとを継いでノーベル賞を受賞する仕事をしてもらえ

たら非常に嬉しい、とメッセージを贈られました。津曲敏郎館長は、鈴木先生のお言葉通りに夢中になれるものを見つけてほしい、さまざまな分野の展示がある博物館にもそのヒントがあるかもしれないと語られました。

参加児童にとって鈴木先生と過ごした時間も、先生との記念写真も、よい思い出になったのではないのでしょうか。この実験イベントの司会は、ミュージアムマイスターの理学部3年生(当時)の三嶋渉と山本大貴が務め、児童達の実験を手伝い、イベント終了後に参加児童と保護者の方々を対象に館内のノーベル化学賞受賞記念展示や恐竜、岩石の展示の解説も行いました。

三嶋 渉・山本大貴
(理学部4年/ミュージアムマイスター)



参加者全員で集合写真

津曲館長(中央)と司会を務めたミュージアムマイスターの三嶋(左)、山本(右)

2012年度第2回 ボランティア講座 & 交流会

総合博物館では、約180名のボランティアの方に標本整理や展示解説、図書室業務など13分野で活動していただいています。水産科学館でも矢部衛館長と河合俊郎助教の指導のもと、学生ボランティアが熱心に活動しています。



山本准教授を囲んで

2012年度第2回のボランティア講座 & 交流会は、地球科学を研究する山本順司准教授を講師にお迎えして2013年2月2日に開催しました。子どもの頃に芽生えた宇宙への関心が、研究者となってから「地球の中の宇宙探し」へと変わっていく様子を分かりやすくお話していただきました。ハワイの海底火山を研究する船上での他研究チームとのやりとりも大変興味深いお話でした。また、大学3年生の頃に阪神大地震の予知に関わる研究チームに所属なされた経験から、市民の方々、特に中学生など子ども達に地球内部について学んでいただく機会を提供しなければならないと考え、「地球体感教材開発プロジェクト」に取り組みされてきたことをご紹介いただきました。このプロジェクトでは、地球で起こっている様々な自然現象を体感できる教材をなるべく安全で本物で身近で安く制作し、学校教育や生涯学習の現場で使っていただくことが目指されています。教材の実例をいくつも見せていただき、講座に参加なされたボランティアの皆様から歓声があがりました。

その後の交流会では、参加して下さった皆様から、日ごろのボランティア活動の様子を楽しくお話いただき、異なる分野への興味を持って下さった方もいました。

湯浅万紀子

(研究部准教授 / 博物館教育学)

博物館まつり 2013



研究報告会での
学生による研究発表

お宝会場とお宝カフェ

3月16日・17日に「博物館まつり2013」を開催しました。「博物館まつり」は、総合博物館における今年1年の活動内容を皆さまにお知らせするとともに、参加者の皆さまと交流を深め、情報・意見を交換するイベントです。

16日は「年次報告会」と「研究報告会」を開催しました。「研究報告会」では、研究部教員、資料部研究員、GCOE研究員、そして学生が多彩な研究や活動を分かりやすく紹介しました。また、17日はバックヤードや展示解説のツアー、「宇宙の4Dシアター」、「チェンバロコンサート」など7つのイベントを開催しました。晴天にも恵まれ、親子連れを中心に1,000人を超える皆さまに来館いただきました。スタッフ一同の予想をはるかに超える来館者数に、人数制限のあるイベントでは不本意ながらた

共催講座

「エルムの杜の宝もの」



第1回の講座(写真:道新ぶんぶんクラブ提供)

総合博物館では2009年度から北海道新聞ぶんぶんクラブとの共催講座「エルムの杜の宝もの」を開催しています。道新ぶんぶんクラブ会員を対象にした講座であり、当館を初めて訪れる方も多く、この講座を通して当館を知っていただくよい機会になっています。通常



バックヤードツアー

くさんの方々にイベント参加をお断りせざるを得なくなってしまいました。両日ともに開催した企画小展示「博物館まつりだけのお宝公開!」や「お宝カフェ」、「写真展 北方四島の自然」、「CISE ネット展」も多くの方々でにぎわっていました。

このイベントを通じて、市民の皆さまが北大総合博物館に大きな興味・関心・期待を寄せられていることを力強く再確認できました。このまつりの開催は、学生、院生、ボランティア等々、多くの方々に支えられて初めて可能となりました。末筆ながら、この場を借りてご協力いただいた皆さまへ心より御礼申し上げます。

江田真毅

(研究部講師 / 考古学)

は展示していない学術標本を間近にご覧いただいたり、学生の展示解説を聞いていただいたり、札幌市内の歴史的建築物を巡るツアーを開催し、本学の研究の伝統と現在を解説し、ご好評をいただきました。6月から10月に開講した講座は次の通りです。第1回「館長の博言学講座——コトバがわかるために」(津曲敏郎教授 / 北方民族言語学)、第2回「大学博物館学講座——博物館の内と外」(湯浅万紀子准教授 / 博物館教育学)、第3回「地球を科学する」(山本順司准教授 / 地球科学)、第4回「市内中心部の歴史的建築物を巡る」(池上重康助教 / 近代建築史学)、第5回「ティラノサウルスと巨大ワニの争い」(小林快次准教授 / 古脊椎動物学)。第3回の講座では、北大ミュージアムクラブMouseionの学生達が展示解説を担当しました。毎回、ボランティアの方々にもご協力いただき、運営しました。

湯浅万紀子

(研究部准教授 / 博物館教育学)

平成24年10月から平成25年3月までに行われたセミナー・シンポジウム

バイオメティクス市民セミナー

「繊維とバイオメティクス」

広瀬治子(帝人(株)構造解析研究所 研究課長)
日時:10月6日(土) 13:30~15:00
参加者:50名

北大総合博物館土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「天然の原子炉から

次世代安全炉・原子力推進宇宙船まで」
奈良林直(大学院工学研究院 教授)
日時:10月13日(土) 13:00~17:00
参加者:60名

企画展示「日本におけるスキーと

北大スキー部の100年」関連シンポジウム

「スキー術北海道伝来100年にあたってスキー

文化を考える—山スキー・山小屋を楽しむ—」

芳賀孝郎(元芳賀スキー製作所社長、元日本山岳会副会長)
谷口雅春(フリーライター)

渡辺勇(元国立極地研究所長、北海道大学山岳部OB)

大内倫文(北海道大学フンダーフォーゲル部OB)

石川裕司(山岳ガイド、北海学園大学山岳部OB)

宮下岳夫((株)アルパインガイド ノマド)

新谷暁生(ニセコ雪崩調査所所長、酪農学園大学山岳部OB)

大西人史(三段山クラブ代表)

日時:10月14日(日) 13:00~17:00

参加者:130名

GCOE土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座

「サミの人人々と交流を通じて」

川上裕史((財)アイヌ文化振興・研究推進機構)

日時:10月20日(土) 13:30~15:00

参加者:50名

中谷吉郎没後50年記念事業関連講演会

「中谷吉郎と戦時研究」

菊地勝弘(北海道大学名誉教授)

日時:10月27日(土) 13:00~15:30

参加者:30名

企画展示「日本におけるスキーと

北大スキー部の100年」関連セミナー

「札幌周辺の山小屋の成り立ち」

在田一則(資料部研究員)

日時:10月28日(日) 13:30~15:00

参加者:20名

バイオメティクス市民セミナー

「農業とエントモメティクス・バイオメティクス」

森直樹(京都大学農学研究所 准教授)

日時:11月3日(土) 13:30~15:00

参加者:60名

北大総合博物館土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「原子力発電所のリスクと日常生活のリスク」

杉山 憲一郎(大学院工学研究科 名誉教授)

日時:11月10日(土) 13:30~15:00

参加者:70名

GCOE土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座

「映像を通じてみるサミの文化(2)」

橋本晴子(スノーユクティブ代表)

日時:11月17日(土) 13:30~15:00

参加者:30名

バイオメティクス市民セミナー

「生物画像から工学的「きづき」を生み出す

新しいデータベース」

長谷山 美紀(大学院情報科学研究科 教授)

日時:12月1日(土) 13:30~15:30

参加者:30名

北大総合博物館土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「TPPと北海道農業」

東山 寛(大学院農学研究院 助教)

日時:12月8日(土) 14:30~15:30

参加者:120名

GCOE土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座

「サミ展示—境界を越える学術・文化交流の創出」

マルティナ・チュリセツァ

(フィンランドセンター北海道事務所 所長 ※当時)

日時:12月15日(土) 13:30~15:30

参加者:70名

国際シンポジウム

「海浜性甲虫の進化と多様性 Evolution and

Biodiversity of the Littoral Beetles」

Mi-Jeong Jeon(韓国環境庁生物資源博物館 NIBR

/ 北大総合博物館 客員准教授)

大原昌宏(総合博物館 教授)

稲荷尚紀(総合博物館 資料部研究員)

工藤雄太(公益財団法人屋久島環境文化財団)

小林憲生(埼玉県立大学)

日時:1月24日(月・祝) 13:30~16:15

参加者:30名

北大総合博物館土曜市民セミナー

「食糧問題から見る昭和史」

白木沢 旭児(大学院文学研究科 教授)

日時:1月12日(土) 13:30~15:30

参加者:90名

バイオメティクス市民セミナー

「ゲルとバイオメティクス」

グン 剣葦(大学院先端生命科学研究院 教授)

日時:1月13日(日) 13:30~15:00

参加者:60名

GCOE土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座

「旅する画家たち—ロシアと日本の境界の風景」

ナターリア・キリュヘナ(ロシア芸術家同盟サハリン支部)

日時:1月26日(土) 13:30~15:30

参加者:20名

バイオメティクス市民セミナー

「ものつくりと暮らし方の新潮流を創る

—ネイチャー・テクノロジー—」

石田秀輝(東北大学大学院環境科学研究所 教授)

日時:2月2日(土) 13:30~15:00

参加者:60名

北大総合博物館土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「考古動物学から考えるアホウドリの歴史」

江田真毅(総合博物館 講師)

日時:2月9日(土) 13:30~15:00

参加者:80名

国際シンポジウム

「インドネシアの昆虫多様性

~北大とボゴール動物学博物館の共同研究~」

Djunijanti Peggie

(インドネシア科学院生物学研究センター / 客員教授)

藤山直之(北海道教育大学旭川校 准教授)

Sih Kahono(インドネシア科学院生物学研究センター)

片倉晴雄(大学院理学研究院 特任教授)

戸田正憲(総合博物館 資料部研究員)

Awit Suwito(インドネシア科学院生物学研究センター)

Dhian Dwibadra(大学院農学研究院)

高久 元(北海道教育大学札幌校 准教授)

大原昌宏(総合博物館 教授)

日時:2月11日(月・祝) 13:30~16:00

参加者:40名

GCOE土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座

「カムチャツカ・北千島の自然と人々」

ピクトル・オクルーギン

(ロシア科学アカデミー極東支部火山地震研究所)

日時:2月16日(土) 13:30~15:30

参加者:80名

バイオメティクス市民セミナー

「バイオメティクスの社会受容と

サイエンス・コミュニケーション」

阿多誠文(産業技術総合研究所 ナノシステム研究部門

ナノテクノロジー戦略室長)

溝口 理一郎(北陸先端科学技術大学院大学 サービス

サイエンス研究センター 教授)

古田 ゆかり(高等教育推進機構CoSTEP 特任准教授)

亀井信一

((株)三菱総合研究所人間・生活研究本部 本部長)

齊藤 彰(大阪大学工学研究科 精密科学専攻 准教授)

日時:3月2日(土) 13:30~16:40

参加者:80名

北大総合博物館土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「原子力発電所の廃炉と放射性廃棄物の処分」

小崎 完(北大大学院工学研究院 教授)

日時:3月9日(土) 13:30~15:30

参加者90名

公開講演会

「ティラノサウルス科は何を食べていたのか?」

イ・ユンナム(総合博物館 特任教授)

日時:3月20日(水・祝) 13:30~15:30

参加者:70名

講演会

「地球のいのち

— ロシア沿海州から北極海、アフリカまで」

あべ弘士(絵本作家)

日時:3月23日(土) 14:30~15:30

参加者90名

平成24年10月から平成25年3月までにおこなわれたバラタクソノミスト養成講座

鉱床バラタクソノミスト養成講座(初級)

松枝大治

日時:10月13日(土)~14日(日) 定員:10名

対象:中学生以上・一般(参加者10名)

鉱物バラタクソノミスト養成講座(初級)

三浦裕行

日時:10月21日(日) 定員:10名

対象:中学生以上・一般(参加者12名)

木製品バラタクソノミスト養成講座(初級)

守屋豊人・佐野雄三・渡邊陽子

日時:10月27日(土) 定員:15名

対象:中学生以上・一般(参加者3名)

鉱物バラタクソノミスト養成講座(中級)

三浦裕行

日時:10月28日(日) 定員:6名

対象:初級修了者(参加者5名)

鉱物バラタクソノミスト養成講座(上級)

三浦裕行

日時:11月4日(日) 定員:4名

対象:中級修了者(参加者3名)

石器バラタクソノミスト養成講座(中級)

高倉 純

日時:11月11日(日) 定員:10名

対象:初級修了者(参加者10名)

木製品バラタクソノミスト養成講座(中級)

守屋豊人・佐野雄三・渡邊陽子

日時:11月17日(土)~18日(日) 定員:15名

対象:初級修了者(参加者15名)

昆虫バラタクソノミスト養成講座(初級)

セミとカメムシ類(初・中級) in 小樽

山本亜生・大原昌宏・稲荷尚記・佐野正和

日時:11月24日(土) 定員:12名

対象:小学5年生以上・一般(参加者12名)

鉱床バラタクソノミスト養成講座(中級)

松枝大治

日時:12月1日(土)~2日(日) 定員:6名

対象:初級修了した高校生以上・一般(参加者6名)

岩石バラタクソノミスト養成講座(上級)

在田一則

日時:12月8日(土)~9日(日) 定員:5名

対象:中級修了者(参加者5名)

鉱床バラタクソノミスト養成講座(上級)

松枝大治

日時:12月15日(土)~16日(日) 定員:4名

平成24年10月から平成25年3月までの
主な出来事

10月1日	特任准教授 Jeon Mi Jeong (ヨンミーヨン)先生 着任	12月23日	ポブラチェンバロクリスマスコンサート 開催
10月2日	中谷宇吉郎没後50年記念事業秋季展示「雪と氷の科学者 中谷宇吉郎」開催(～12/2)	12月31日	研究支援推進員 河原法子さん 退職
10月6日	学生による展示解説(北大ホームカミングデー)	1月15日	研究支援推進員 越前屋宏紀さん 着任
10月7日	第5回 サーミ フィルムシアター 開催	1月21日	特任教授 Lee Yuongnam (イ ユンナム)先生 着任
10月6日 7日	岩石鉱物野外採集会 開催	1月22日	企画展示「ネイチャー・テクノロジーとライフスタイル」開催(～3/17)
10月10日	企画展示「日本におけるスキーと北大スキー部の100年」開催(～12/16)	1月25日	GCOE第8期成果展示「知られざるクリル・カムチャツカ ーロシアから見た境界のイメージ」開催(～5/26)
11月4日	ポブラチェンバロ秋のコンサート 開催 宇宙の4Dシアター 開催 第6回 サーミ フィルムシアター 開催	1月27日	ポブラチェンバロコンサート「アイルランドとイギリスの古い歌 ～民謡からパロッドまで～」開催
11月20日	文部科学省研修生(4名) 解説 文部科学省研究振興局基盤研究課長一行(2名) 解説	1月29日	中谷宇吉郎没後50年記念事業冬季展示「雪のデザイン」開催(～2/17)
11月22日	文部科学省科学技術・学術政策局産学連携・地域支援課地域支援企画官一行(3名) 解説	1月30日	韓日親善委員会会長一行(5名) 解説
11月23日	ポブラチェンバロコンサート 開催	2月2日	中谷宇吉郎没後50年記念事業「科学映画上映会」開催
11月29日	文部科学省国立大学支援課専門職一行(3名) 解説	2月5日	韓国海洋大学校長 解説 韓国平生教育振興院一校(15名) 解説
12月1日	特任教授 Peggie Djunijanti (ベギー ドゥジャニジャンティ)先生 着任	2月10日	中谷宇吉郎没後50年記念事業「科学映画上映会」開催
12月2日	第7回 サーミ フィルムシアター 開催	2月24日	ポブラチェンバロコンサート「ヴェルサイユ宮廷の音楽」開催
12月11日	文部科学省大臣官房総務課広報室専門官一行(3名) 解説	3月16日 17日	博物館まつり2013 開催
12月13日	文部科学省科学技術・学術政策局産業技術・地域支援課大学技術移転推進室長補佐一行(2名) 解説		

入館者数(平成24年10月～平成25年3月)

入館者数	見学会 体数	解説の 件数	企画展示(略称)
10月	9,556	25	7 「雪と氷の科学者 中谷宇吉郎」(10/2～12/2) 「日本におけるスキーと北大スキー部の100年」(10/10～12/16)
11月	8,146	13	6 「雪と氷の科学者 中谷宇吉郎」(10/2～12/2) 「日本におけるスキーと北大スキー部の100年」(10/10～12/16)
12月	2,964	3	3 「雪と氷の科学者 中谷宇吉郎」(10/2～12/2) 「日本におけるスキーと北大スキー部の100年」(10/10～12/16)
1月	2,463	5	3 「ネイチャー・テクノロジーとライフスタイル」(1/22～3/17) 「雪のデザイン」(1/29～2/17)
2月	4,680	6	4 「ネイチャー・テクノロジーとライフスタイル」(1/22～3/17) 「雪のデザイン」(1/29～2/17)
3月	5,836	1	1 「ネイチャー・テクノロジーとライフスタイル」(1/22～3/17)

[表紙イラスト]

白亜紀中頃の Gondwana 大陸に棲息した巨大ワニ・サルコスタスと肉食恐竜・スコムミス(画:©RAUL MARTIN/2001)



北海道大学総合博物館ニュース 第27号
編集: 江田真毅・成田佳子
発行日: 2013年(平成25年)7月10日
発行者: 津曲敏郎

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等で協力いただきました。謹んで御礼申し上げます(平成24年10月1日～平成25年3月31日)

(敬称略)

●植物標本

大原和広, 桂田泰恵, 加藤典明, 金上由紀, 黒田ツツ, 甲山幸子, 佐藤広行, 鈴木順子, 須田 節, 高橋美智子, 竹内元信, 徳原和子, 永山 修, 成田敦史, 船迫吉江, 星野フサ, 松井 洋, 村上麻季, 吉中弘介, 与那覇モト子

●菌類標本

石田多香子, 菅 妙子, 齋藤美智子, 外山知子, 丸山満枝, 三浦美恵子, 矢部敦子

●昆虫標本

青山慎一, 植田俊一, 梅田邦子, 大矢朗子, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲, 小向愛, 佐藤園男, 志津木真理子, 志藤奈津子, 関田高宏, 鳥山麻央, 永山 修, 古田未央, 松本侑三, 丸子勝彦, 宮本昌子, 村井容子, 村田真樹子, 村山茂樹, 村山真紀, 山本ひとみ

●考古学

伊藤なつみ, 大西 凜, 亀井和久, 斉藤理恵子, 佐々木征一, セルゲイ・ヴァチェスラヴォヴィチ・ガルヴノフ, 西本結美, 矢野加奈

●地学

在田一則, 岡田奈緒美, 生越昭裕, 加藤典明, 加藤利佳, 加藤義典, 甲山幸子, 塚 俊樹, 佐藤和子, 嶋野月江, 塚田則生, 筒井彦七郎, 寺坂絵里, 寺西辰郎, 野村敏則, 福地伸章, 山崎敏晴, 山本ひとみ, 与板清香, ロバート・クルツ, 若有祐子, 渡辺隆司

●情報

大石琢也, 手塚麻子

●化石

朝見寿恵, 安 翔宇, 安藤匠平, 飯島正也, 池上 森, 石橋七朗, 今井久益, 大澤千里, 大塚健斗, 岡野忠雄, 尾上洋子, 加藤利佳, 金内寿美, 久保田 彩, 栗野里香, 小向 愛, 近藤知子, 近藤弘子, 酒井 実, 鈴木順子, 園部英俊, 高崎竜司, 田中公教, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手塚麻子, 寺西育代, 寺西辰郎, 内藤美穂子, 中島悠貴, 中野 系, 長瀬のぞみ, 永田萌子, 古井 空, 前田大智, 森淑子, 八巻千晶, 山下暁子, 吉田純輝

●北大の歴史展示

石川満寿夫, 石黒弘子, 寺西辰郎

●展示解説

在田一則, 飯島正也, 石田有莉子, 石橋七朗, 大塚健斗, 金川史歩, 河本恵子, 児玉諭, 園部英俊, 高崎竜司, 武石 充, 武田増満, 田中公教, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 寺西辰郎, 中野 系, 成田敦史, 西川笙子, 沼崎麻子, 沼田勇美, 日並雄太, 村井容子, 村上龍子

●平成遠友夜学校

石川満寿夫, 石黒弘子, 石田多香子, 柿本恵美, 菅 妙子, 齋藤美智子, 城下治子, 高山緋沙子, 竹内元信, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 細谷信二, 牧野小枝子, 村井容子, 山岸博子

●図書

岡西滋子, 亀井和久, 児玉 諭, 今野成捷, 齋藤美智子, 須藤和子, 高山緋沙子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮎田久恵, 星野フサ, 村上龍子, 安田 正, 山岸博子

●4Dシアター

石倉未奈, 井上拓己, 金川史歩, 久保拓士, 小俣友輝, 小松麻美, 瀬川陽子, 高平 謙, 高山緋沙子, 田中公教, 塚田則生, 平田崇夫, 福澄孝博, 牧野小枝子

●ポブラチェンバロ

浅川広子, 池野麻里, 石川恵子, 石川万利子, 石田美和, 大友弥生, 大矢朗子, 小野敏史, 佐藤浩輔, 清水聡子, 新林俊哉, 園部英俊, 高橋友子, 谷川千佳子, 津滝麻衣子, 田邊由美子, 長竹 新, 中村会子, 新妻美紀, 浜田宏之, 福士江里, 藤井美雪, 松田祥子, 山本葉子, 渡邊万記子

●翻訳

津滝麻衣子, 松田祥子

●水産科学館

池田浩介, 岩井卓也, 大橋慎平, 荻本啓介, 奥香菜美, 尾関なつみ, 加藤君佳, 金子尚史, 亢 世華, 川内惇郎, 菊池 優, 北島 空, 櫻井慎大, 佐々木嘉子, 佐藤広崇, 柴田和也, 杉原菜月, 瀧宮 誠, 竜田直樹, 館山怜央, 棚野秀平, 永野優季, 森田恭司, 山中智之, Monruedee Chaiyapao

●「ネイチャー・テクノロジーとライフスタイル展」

鈴木順子, 古田未央, 村上麻季, 山本ひとみ

発行所: 北海道大学総合博物館
所在地: 060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
E-mail: museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/

デザイン・印刷
畠山尚デザイン制作室